様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 6 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520256
研究課題名（和文）　男性ホモソーシャリティとジェンダー支配を近代から現代に辿るトマス・ハーディ研究
研究課題名（英文）　The Male Homosocial Relationship and Gender System in the Novels of Thomas Hardy

研究代表者
亀澤　美由紀（KAMEZAWA MIYUKI）
首都大学東京　人文科学研究科　教授
研究者番号：60279635

研究成果の概要（和文）：
(1) 『日陰者ジュード』を女性・ことばの象徴交換システムとして分析した。『ジュード』のテクストがリアリズムに内在する矛盾を内側から突き崩していくプロセスと、ジュードが結婚制度を否定していくプロセスが、軌を一にすることを明らかにした。
(2) 貨幣論をハーディ小説の分析に利用することによって、文学テクストと経済との関連性を捉えることができた。
(3) フランシス・バーカーの理論をハーディ小説の分析に利用することの可能性を見出した。

研究成果の概要（英文）：
(1) In this project, *Jude the Obscure* was successfully analyzed as a symbolic economy where the female body and words are circulated with the effect of establishing/undoing the subjectivity of a man. What is unique about the novel is that the text serves itself to disturb the realism ideology while the narrative itself is written in the form of realism. These two opposing movements are related to the fact that the marriage system, another ideological apparatus of the bourgeois ideology, is severely under attack.
(2) I also managed to apply the representational theory of money to Hardy’s literature. *The Woodlanders* offered itself as a convenient sample text for the interdisciplinary analysis between literature and economics.
(3) I also found the possibility of adopting Francis Barker’s theory to Hardy’s novels.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	300,000	90,000	390,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英文学

１．研究開始当初の背景

トマス・ハーディ（1840-1928）に関する従来のジェンダー研究は、男性・女性の一方の性にのみ焦点をあててきた。それらの多くは、女性がどのように男性社会の被支配者であるかの分析に終始するのみで、その前提にある男同士の緊密な紐帯関係には関心を向けてこなかった。なかには、男同士の緊密な紐帯関係に注意を向けるかなり先端的切り口も見られたが、それらは女性に対する関心を欠いており、むしろ＜異性愛者/同性愛者＞の二項対立を強固にするという負の副産物をもたらした（例えば『カースタブリッジの町長』を分析した Dale Kramer, Elaine Showalter, T.R.Wright, Robert Langbaum など）。女性、男性どちらに焦点をあてるにせよ、性的マイノリティを実体化することに与する点で変わりはなかったのである。

必要なのは男同士の絆のなかに女性をおいて見る視点であった。まさにそれを提供したのが Eve. K. Sedgwick の *Between Men*(1985)[『男同士の絆』、上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001]だった。セジウィックの主張を辿ると以下のようになろう。女性が社会のマイノリティであるのは男同士のホモソーシャルな絆が女性を排除してきたからにほかならない。結婚制度は実のところ、疎外された女性を社会の中に安全に取り込む手段であり、異性愛主義体制もこのことと無関係ではない。近代は、ホモフォビア（同性愛嫌悪）に貫かれた男性ホモソーシャル体制、ミソジニー（女性嫌悪・女性性嫌悪）、および異性愛による結婚制度が三位一体となって社会の規範となっていった時代である。以上が、セジウィックの論のおおまかなまとめであるが、性の問題を性愛の三角形のなかで描いたハーディの小説を分析するにあたって、セジウィックのこの理論が有効であることは明らかである。本研究はセジウィックに倣い、男性ホモソーシャリティが構造化するジェンダー支配のなかに女性を捉えようとするところから出発した。

２．研究の目的

ハーディの小説を男性ホモソーシャリティの観点から分析することにより、近代がホモフォビックな視線のもとにジェンダーを構築し、それと相補的にナショナル・アイデンティティの形成や階級制度・結婚制度の補強がなされてきた事実を明るみにすることを目的とした。平成 18-20 年度の科研費研究は『ラッパ隊長』から『テス』に至る中・後期小説四編を分析した。したがって、本研究では以下の点を目的とすることとした。

ほぼ最後期の小説『ジュード』をリアリズムの観点から分析し、男性ホモソーシャリティが構造化するジェンダー支配にひずみの入る瞬間を描いたものとしてそれを読む。並行して、作家ハーディがどのように現代社会に表象されているかを辿ることによって、現代社会の性に対する意識と近代との関係を炙り出す。『ジュード』分析でハーディ文学の方向性を見定めたのち、23 年度以降は初期作品群の分析を行う。そして最後にこれまでの研究全体を支える理論的枠組みを整理し、それを研究全体の第一章とすることにより論文全体（研究書）の構成を整えるというのが当初の目的であった。

３．研究の方法

まずは『日陰者ジュード』を扱い、語りと物語の間の裂け目から近代ブルジョワのジェンダー観にひずみが発生していく様子をリアリズムの観点から分析することとした。

この物語の語り手は三人称客観描写をひそかに放棄し、スーの内面を語らないことによってジュードと読者の間にホモソーシャルな関係を結ぶ。だが内面を隠匿されエニグマを抱え込んだスーは逆に、ジュードを家父長制社会から脱落させていく。ホモソーシャリティとリアリズムの関係を浮かび上がらせることによって、本研究のテーマに迫ろうというのが計画の主要な部分であった。

そのほか、映画「ジュード」におけるリアリズムを検証することを予定した。ブルジョワの価値観から生まれたリアリズムの手法と、現代大衆社会の娯楽とされる映画との関係、そして現代の性の表象に議論が及ぶだろうと思われた。そののち、初期の小説『狂乱の群れを離れて』『帰郷』の分析および本研究の理論的柱を整理し論文にまとめる作業を行うことを計画した。

４．研究成果

研究期間の前半は『ジュード』を重点的に分析した。そこから新たに浮かび上がったのは、ことばの表象性に対する視点である。ことばを象徴交換の枠組みで捉えかえすことによって、「リアリズム/モダニズム」という文学ジャンルの問題に視野を広げることができた。『ジュード』に関する具体的研究成果は次の 2 点である。

論文(1)「象徴交換の亀裂―ジュードとリアリズムと＜古い革袋＞」、『人文学報（表象文化論)』(首都大学東京)、査読無、446 号、2011 年、43-66。

論文(2)「『日陰者ジュード』―リアリズムの裂け目」、『ハーディ研究』(日本ハーディ協会編)、査読有、36 号、2010 年、55-68。

『ジュード』では女性・ことばという二つの交換財をめぐる象徴交換のテーマが深く縒り合わされている。女性・ことばを交換財とする象徴交換のシステムを『ジュード』のなかに分析することによって、『ジュード』と近代の関係を考察した。ジュードの人物造形が多分にリアリズム的要素を含むこと、それにもかかわらずジュードの物語そのものはリアリズムが依拠する近代ブルジョワのイデオロギーを破壊する方向に働くという事実に焦点をあてることにより、『ジュード』のテクストが、リアリズムが内包する矛盾に内側から楔を打ち込み、その矛盾を起動させてしまうプロセスを明らかにした。そしてさらに、それが結婚制度に対する疑問とも並行して生起する事実に目をむけた。言うなれば、ジュードがリアリズムを崩壊させていくプロセスと、結婚制度を否定していくプロセスとは、同じ車軸の両輪なのである。

文学様式の観点からなされた分析はこれまでにもあったものの、セジウィックを徹底的に利用することによって、ジャンル論をジェンダー論と結びつけることに成功した。その点において、この研究は新しさがあると考えられる。

論文(1)(2) が依拠したのは言語学理論であった。そもそもセジウィックの理論の根底には言語学理論がある。ホモソーシャル連続体理論の分析的力を十全に使いこなすために言語学理論を押さえる必要があり、その副産物として生まれたのが次の論文である。

論文(3)「ヒトガタの逍遥する国ジャパン――Imaginary Girl 展」、『PHASES』(首都大学東京　人文科学研究科表象文化論分野」、査読無、1 号、2011 年、10-14。

ここでは、ことばと少女の表象を同じ土俵に載せて、言語学理論的アプローチを試みた。ハーディ批評との直接のつながりはないものの、少女の表象に関する議論はそのままハーディの女性像につながるものであり、間接的に、2012 年度以降の分析を支えることとなった。また、(3)が中心に据える現代社会への分析的視線もまた、この後の分析に大きく役立つこととなった。

本研究の二つめの成果は、ことばを交換財とする象徴交換に加えて、貨幣のテーマを探りあてたことである。貨幣に関する表象理論を用いることによって、ジェンダーやセクシ

ュアリティに限定されていた研究の視野が一挙に経済システムに広がった。参照したのは、Jean-Joseph Goux, *Les Monnayeurs du langage*(1984)[『言語の金使い』土田友則訳 1998)]であり、これを援用して執筆したのが次の２点である。

論文(4)「転覆させる十字――『森林地の人々』考察」、『ハーディ研究』(日本ハーディ協会編)、査読有、38 号、2012、50-61。

ジャン・ジョゼフ・グーは、文学におけるリアリズムの危機と金本位制の危機がともに 1920 年代に起きていることに注目し、「金貨幣に基づく価値流通の破綻が、言語の写実的もしくは表象的なシステム[すなわちリアリズム]の破綻を示すメタファーとなっている」と述べる。論文(4)ではグーの理論を『森林地の人々』に援用した。『森林地の人々』を分析対象として、女性の交換のテーマ（結婚制度への疑念）・ことばのテーマ（リアリズムからモダニズムへの移行）・貨幣交換のテーマ（実体貨幣経済から信用経済への移行）といった一見バラバラのテーマを縒り合せて論ずるという、魅力ある可能性を発見することができた。

論文(5)「アリスが地下に落ちる、金本位制が崩れる―1973 年のふたつの出来事」、『PHASES』(首都大学東京　人文科学研究科表象文化論分野」、査読無、２号、2011、6-10。

論文(5)も(3)と同様にハーディ批評との直接の関係はない。しかし、経済システム・貨幣制度を現代社会制度に結びつけるという視点は、(3)から生まれたものであり、同時にその成果は 2013 年度以降の研究につながることが確実である。

第三の成果は、身体論を援用することの可能性を見出したことである。Francis Barker, *The Tremulous Private Body*(1984)[『振動する身体――私的ブルジョア主体の誕生』末廣幹訳 1997]が言うところの「テクスト化された身体」という視点を加えることによって、性や身体を再度、歴史的視座において分析することの有用性が見出された。テクスト化された身体（生身の肉体を不可視にされた身体）は、演劇（または小説）の表象性を隠蔽するブルジョワ・リアリズムにつながるのだというバーカーの主張は、本研究が柱とする＜身体とことば＞に直結する。ハーディの小説において身体性とことばの問題がどのように絡み合って描かれているかを分析する際の強力な分析の道具が得られたと考えられる。

貨幣論・身体論という大きなテーマとのつながりを見出したために、当初予定していたハーディの初期の作品の分析は手つかずであったが、それを上回る分析の視点を獲得することができたと考える。今回の研究により、身体・ことば・貨幣というテーマでハーディの小説世界を象徴交換の世界として包括的に分析する展望が開けた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①亀澤美由紀「転覆させる十字――『森林地の人々』考察」、『ハーディ研究』(日本ハーディ協会編)、査読有、38 号、2012、50-61。

②亀澤美由紀　「アリスが地下に落ちる、金本位制が崩れる―1973 年のふたつの出来事」、『PHASES』(首都大学東京　人文科学研究科表象文化論分野」、査読無、２号、2011、6-10。

③亀澤美由紀　「ヒトガタの逍遥する国ジャパン―Imaginary Girl展」、『PHASES』(首都大学東京　人文科学研究科表象文化論分野」、査読無、１号、2011 年、10-14。

④亀澤美由紀　「象徴交換の亀裂―ジュードとリアリズムと＜古い革袋＞」、『人文学報（表象文化論)』(首都大学東京)、査読無、446 号、2011 年、43-66。

⑤亀澤美由紀　「『日陰者ジュード』―リアリズムの裂け目」、『ハーディ研究』(日本ハーディ協会編)、査読有、36 号、2010 年、55-68。

６．研究組織

(1)研究代表者

亀澤　美由紀　(KAMEZAWA MIYUKI)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：60279635